

## — 滑川道夫先生をたずねて —

（本稿は滑川道夫先生をおたずねしてお聞きしたものを文章にしたものです。とくに、先生の国語教育思想が形成された、あるいはその契機や基盤となった青少年時代一昭和七年四月に成蹊小学校に上京するまでの秋田時代の思い出を中心にお聞きしました。先生の国語教育論を深く理解し、さらには大正期や昭和初期の国語教育思潮を理解するためにも、貴重な資料の一つになると思います。— 編集部）

### 1. 父の影響 — 自由主義思想

編集部 先生のお父様も教師だったようですが、お父様はどのような方でいらっしゃったのでしょうか。お父様からの影響としてどのようなことが思い出されますでしょうか。

滑川先生 私の父は師範時代成績が良かった。その自慢話はよく聞かされました。卒業のときに、知事賞として銀時計をもらい、その銀時計を父は常に愛用していました。。一番で卒業し、同級生よりも俸給が一円か二円高かったという自慢話もよく聞かされたものです。家は、没落士族で、父は、二人の姉達の働きによって、師範を卒業することができたと言っていました。

父は私に勉強しろと言ったことはない。勉強というのは、自分で本当にやろうと思わなければだめで、強制的にやらせてもだめなんだという考え方をもっていただようです。私が勉強したいと言いつくすまでは、勉強のことや宿題をやったかということは一言も言わなかった。私はそれをいいことにして小学校時代遊びほおけたのでした。けれども、学校の勉強以外のこと、例えば、小学校二年の時にローマ字を教えてくれた。日本語もまだろくに知らないうちに、ローマ字を教えてくれたわけです。それから、まだその頃学校には「そろばん」が課されていませんでしたが、その「そろばん」を教えてくれました。もう一つ覚えているのは、漢文の素読です。『近古史談』というのがあって、私は意味はわからないけれど父の読む通り口誦するのです。「天徳寺良伯平語を聴く……」といった調子で暗誦していくわけです。あとで、父はそれを解説して読み聞かせるのでした。学校の教科課程にはない勉強の手引きをしてくれました。貧乏生活のなかで多趣味な生活をしていました。例えば父は俳句をやっていました。その俳句は自由律の俳句で、日本派の俳人達から分れた自由で型にとらわれない俳句でした。父は俳句の雑誌『層雲』と『海紅』（この二つの雑誌は大正期の自由律俳句の二大雑誌で、『層雲』は明治四十四年河東碧梧桐主宰、荻原井泉水編集で創刊。井泉水の「季題無用論」から、河東碧梧桐や中塚一碧桜らは大正四年『海紅』を創刊。）をとって、その父の姿を見て私も刺激されてまねして俳句をつくったりした。『海紅』の方に父は投稿していて、その後私も秋田師範の学生の時に投稿するようになりました。父にはこのように自由主義的な発想があって、その影響を受けて私は育ったんじゃないかと思います。

また、父は酒は一滴も飲めませんでしたが、趣味が非常に広がった。書道もやっていたし、学

校から帰ると盆栽の手入れもしていた。それから、小鳥の類を飼っていて家の中には鳥かごがいっぱいさがっているんです。朝早く起きてすり餌をつくったりしていたのを覚えてます。座敷が糞だらけになってしまう。母がそれでよく文句を言ったのを覚えています。小鳥が死ぬと自分でそれを剥製にもしてましたし、小学校長をしていた学校の動物標本はほとんど父が作ったんじゃないかなどと人に言われていました。どこでそのような技術を習ったのか知りませんが、いろいろなことをよく知っていました。

博識で、一緒に散歩しても草花の名前などをよく教えてくれました。私の方は草花に興味がなく有難迷惑みでしたが、これは何科の何と教えてくれるわけです。露草なども、その花をしぼって染めた色は“はなだ”色であるとか鎧のオドシの色の話など、平家物語の若武者の話を引用しながら説明してくれました。また魚釣りが大好きで、小学校に入る前から日曜日に近くの村の川へ鮒釣りに私を連れていった。片道一里半、往復三里ぐらい歩くわけです。父は意図的にそうしたのかどうかわかりませんが、足腰が鍛えられ、私は今この年になって何とか歩ける足腰もっていることは父のおかげだと思って感謝しています。歩きながらお伽噺をしてくれたこともおぼえています。

## 2. 小学校時代

編集部 最近出版された『北方教育』（法令出版 昭54年）に先生がお書きになっていて、湯沢女子小学校に赴任したところその女の先生方は湯沢の出身で、その先生方は「私が小学生のころ鼻垂れ小僧で泣き虫だったことまでよく知っているの、たいへん苦手意識が強かった」(p.7)という一節がありますが、小学生時代の印象に残る思い出をお聞かせ下さい。

滑川先生 まだよく覚えているんだが、小学校一年に入る入学式の時母親が妊娠していて私を入学式に連れていくことができなかった。そこで親戚のいとか誰かが代りに連れていってくれた。私はその時始めて大勢の人の集りを経験しておどろきました。体操場が式場で、あたりを見ても誰も知っている者がいないから、式が始まる時「お母さん！」と叫んでワンワン泣きはじめた。女の先生がきて私を外に連れていった。泣き虫だったんだなあ、私は。

それから一年生の時、腎臓病か何かで長い間学校を休み、休んだ後は大変学校に出にくい。それで学校嫌いになってしまいました。身体も丈夫な方ではなかったと思います。このことは、その後教師になって子どもを見る時の私の視点になっていると思います。小学校時代兄弟喧嘩はよくやりましたが、ほかの子と喧嘩したことはなかった。喧嘩してもかなわないという事実も大きかったけれども、両親とも教師（母は当時子育て専業）であったということが圧迫感みたいなものを私に与えていたわけです。先生の子どもが、校長先生の子どもが喧嘩したなどと言われることは、両親が非常に困ることだろうと私は感じていた。ですから、他の子どもが何か悪いいたずらをしても、ちょっと仲間はづれになるような傾向がありました。これが私に孤独の精神を植えつけたかも知れません。私は成蹊小学校の教員になった時、自分の子どもを成蹊に入れました。その時、私の小さい頃を振り返ってみて、子どもがその親父の朝礼の訓辞を聞いたり、仲間達と

一緒に何かいたずらをしようと計画する時に仲間はずれになったり、自分から離脱するのではないかと思いました。これは子どもの不幸ではないかと思ったことがあります。ですから、私は教師の子どもを受け持った時はそのことをよく考えます。そのような子どもを解放してやらなくてはならないと強く思うようになりました。

高等小学校一年の時、田口先生という新卒の青年教師が担任してくれました。田口先生は元気がよくて、日本とアメリカは必ず将来戦争をするから、お前達体を鍛えておけというような先生でした。恋愛御法度の時代で、先生は同僚の女の先生と恋愛して左遷させられてしまいました。峠を越えた山奥の学校へ左遷されてしまって、私達は大変悲しかった。雪がどんどん降っている中を、おにぎりを腰につけてその先生が赴任する学校まで一緒についていった。このことは忘れられません。同級会やってもその話は必ず出ます。試験の時悪い点とると、「バカヤロー」なんてどなる先生でしたが、それでいて信頼されていた。それは教室だけの授業での人間関係ではなくて、遊び時間など自分から飛び出して一緒に遊んでくれた、そこからの師弟の人間関係が深まったように思います。

また、田口先生は、横手中学の柔道の選手だった人で、学校側と交渉して体操場に畳をしき柔道を希望者に教えた。私は柔道部に入ってその先生から柔道を習ったんです。泣き虫で心身の弱い他目にはおとなしい子の方でしたが、柔道を習い始めてからある一種の自信みたいなものが出てきました。小学校五年のときから高二まで四年間やりました。このことは私の成長過程の上で非常に大事なアクセントになりました。柔道で体力がついて、それまでのいじめっ子を投げつけたりして、それ以来いじわるな者たちが私に敬意を表するようになり、柔道はいいものだといふに気を強くしました。この先生は、当時まだ珍しかったベースボールも指導してくれました。秋田師範に入学したばかりの時、柔道の紅白試合があり、その時始めて柔道着を着た新入生十七～十八人倒したことがあります。自信を持てばずい分生活態度が変わるものであるということ、柔道を通して、私は体験しました。

私は教師になって、弱虫や泣き虫の子どもを指導する時にこのことを応用してやろうということを考えました。弱い子どもの味方になってカツを入れてやるというようなことは大切です。ですからスポーツはやはり大事なものという気がします。教室で先生からいい話を聞いても忘れてしまうかもしれませんが、そういうことは長く生きている、柔道でなくても何か長ずるものを見つけ出して自信をもたせてやるというのが教育なんだろうと思う。

### 3. 秋田師範時代

編集部　すでに秋田師範時代の話も出てきておりますが、秋田師範に進まれた契機、あるいは教師になろうという契機には何かありましたでしょうか。

滑川先生　父は、自分で考えて自分で進路を決めるべきだという考えで、師範に入れというようなことは言いませんでした。母親は、教師経験をもっていたためか師範の試験を受けたらどうかというような希望をもっておりました。私が生まれて母親は教員をやめたようですが、私は長

男でもありましたから、心の中では教師として後継ぎをしてもらいたいと思っていたのではないかと思います。父は口に出しては言いませんでした。

当時は高等科三年にあたる准教員養成所というものがあったんです。それを出ないと師範の試験は受けられないわけです。中学へ行く友達を見て大変うらやましく思ったこともあります。高等小学校からその養成所に行って、高等三年の終了の資格を得て師範に行つたわけです。

編集部 お父様の自由主義的な考え方の影響を受け、先生御自身もリベラルな人間として成長されていったように感じられます。『北方教育』の中で、師範時代の寮生活にも触れられ、封建的で耐えられなくて寮を出られたことが書いてありますが、このこともお父様から受けたりベラルな人間性的一端というように考えてよろしいのでしょうか。

滑川先生 そうですね。関連があると思っています。

#### 4. 教育派遣生第一号（昭六年九月～十一月）

編集部 滑川先生は教壇に立たれてから三年目の昭和六年に、九月から三ヶ月間、教育派遣生第一号として東京高等師範学校に学ばれていらっしゃるのですが、その時学ばれたことなどお聞かせ下さい。

滑川先生 憧れの垣内松三先生の「日本文学研究」という講義があって、それで行ったわけです。ところが、私は途中から聞いたこともあるけれども、難しくてわけがわからなかった。三ヶ月間しか研究期間がなくて、こんなわからない講義を我慢して聞いてももったいないと思って方針を変えました。そこで附属小学校に行って、綴り方の授業を中心に国語の授業を見てまわり、授業のあといろいろ質問したりして教示を受けたわけです。田中豊太郎先生や佐藤末吉先生に質問して答えてもらったりしたわけです。もちろん、成蹊小学校の西原先生の授業を見せていただいたり質問に答えてもらったりしました。これは国語教育の勉強になりました。飯田恒作先生は立派な業績を残した先生ですけれども、私の質問にあまり誠実に答えてくれませんで、この先生はダメな先生だと自分でかってに判断したりして、若気の至りでした。いたずらに研究心ばかり強い、がむしゃらな青年教師だったように思い返します。

千葉春雄先生は高等師範をやめて厚生閣書店にいていましたが、千葉先生をもたずねました。また、のちの帝国美術学校の教授で『東洋美学』などの本を書いた金原省吾先生もたずねました。金原先生のうちは貧しく見え、本が一杯でその重さで二階が傾いている。子どもが二階から落ちてちてなどと平気で話す先生で急に親しくなりました。私が東洋的な思考に関心を抱くようになったのは、一つには金原先生の影響があると思います。西洋画は光線の明るい所で見えるようにできているのに対して、日本画は薄暗い床の間に掛けて鑑賞するようにできているという質の相違から話が始まるわけです。水墨画は空白部分の意味を読まなければならない。国語も同様に、こゝとばに書かれているところだけ読んでもダメだということを教えられた。外国にない東洋のよさ、東洋の美というものを金原先生から学びました。例えば、器なんかでも、西洋のものは使い初めが一番きれいなんですが、日本の茶碗は使っているうちにだんだんと磨きがかかって美しくなっ

てくる。作者と使用者との両方の力で美が創造され磨かれていくわけです。東洋の美は、長い間かかって美しさが発揮され、そのようなものが本物の美術であり芸術なんだということです。すぐこわれてしまったり、それっきりで終わらないような生活を大事にしていかなくはいけないというようなことです。そういう意味で、私自身の生き方の上にも、金原先生の影響がかなりありました。

## 5. 処女出版『文学形象の綴方教育』前後

編集部 昭和六年の十二月、先生が二十四才の時、『文学形象の綴方教育』（人文書房）を出版されているわけですが、この書が成立した経緯はどのようなものだったのでしょうか。

滑川先生 若気のいたりで本を書き、今思い出すと恥ずかしい。この本の成立には西原慶一先生が登場するわけです。私が卒業後三年目の昭和四年に『綴方新教授原論』という本を出版された。それを買って読んだことがきっかけです。感想を書店気付で西原先生に書き送り、それから手紙のやりとりが始まったわけです。『北方教育』に原稿を書いてもらったり、『北方教育』の私の論文を読んで感想を書いてくれたりして、それで先生が一冊本をまとめて出したらどうかと再三言ってくれました。そこで今まで書いてきたものを中心に一冊書いてみようということになりました。書いている最中に、前に述べた教育派遣生になって三ヶ月間上京したわけです。今まだあるかどうかわかりませんが、茗荷谷の「東郷館」というところに三ヶ月下宿しました。そうしたら人文書房の親父さん（社長・のち集英社出版部長鈴木省三氏）が西原先生から上京していることを聞いたといってたずねてきて、急いで原稿を完成してくれという。それで、昼は附属小学校の授業を見たり、偉い先生方を訪問したりして、夜原稿の続きを書いたわけです。

編集部 そしてその年（昭和六年）の十二月十五日に発行となったわけですね。印税のかわりに本を二十冊ということだったようですね。

滑川先生 本の印税などまだ払える出版社ではありませんでしたから、このことは西原先生からも言われていました。本にしてもらえただけでも地方在住の無名の青年教師にとっては、ありがたかったわけです。正月になってから二十冊の本が届き、父も手にして少し喜んだようなかっこうをしていました。それから間もなく父は病気になってしまったわけです。

編集部 当時、「形象」という考え方がかなり流行していたんでしょうね。またその流れには垣内松三先生の影響もあったんでしょうね。

滑川先生 垣内先生の形象理論が国語教育界にもてはやされていましたね。どこに行っても国語研究会は「形象」の話でした。この本を出す時に西原先生から、垣内先生の序文をもらってあげるという手紙がきました。私はそれを断ったんです。大先生の序文をもらうような本ではないし、それによって本に権威をつけるような精神は気に入らない。父もそのような性格で、人生というのは自分の二本の足で歩くしかないということを言い聞かされていたから。やはり自分の本は自分で出していかなくはいけない。だから、思い上って私は断ったのではなくて、非常に謙遜して断っているわけです。

編集部 翌年の昭和七年四月から、西原先生の招きで成蹊小学校に赴任することになったわけですが、その直前にお父様が亡くなられた。秋田時代は、世界的にも恐慌の時代で、先生の御家庭も経済的には苦しかったんでしょうね。

滑川先生 父の俸給が二十七円というのを覚えている。二十七円のうち二十一円米代にとられるということを父と母が話しているのをふと聞いてぎょっとしたことを印象的におぼえています。

私が教師になって、当時専攻科を出ると十円俸給が高かったので、専攻科を出て附属の訓導になった時（昭和四年四月）、六十一円だった。そのうち三十円家へ送り、あとは本代になってしまった。ですから、おばの家に下宿したりして渡り歩きました。『国語の力』や『国語国文の教育』はどうしても買わなきゃいけなかった。でも、貧乏時代に買った本はよく読む。不思議なことですが、楽に買った本はあまりよく読まない傾向がありますね。県立図書館で特別研究室というのにいれてもらって本を読みました。

編集部 『文学形象の綴方教育』という書名にもあらわれていますように、国語教育のなかでもとくに綴方に力を入れ、綴方から出発したとみてよいでしょうか。国語教育史のなかでも大きな位置を占める芦田先生にしても、西尾実先生にしても、なぜか共通して綴方に力を入れ、あるいは綴り方から出発しているように思います。

滑川先生 その通りですね。私の場合には、一つには西尾先生の影響があります。昭和四年に出た『国語国文の教育』の中で、西尾先生は表現が基本であるということを述べています。私はその考え方に非常に共感をおぼえたわけです。綴方には興味ももっていましたから共感する下地もあったわけでしょうか。国語表現を基底におく展開をいまでも考えています。国語理會と異質なものとは思っておりません。

## 6. 児童文学への興味関心

編集部 先生御自身の研究領域の中で、もう一つ大きなものとして児童文学に関する領域があるわけですが、児童文学に興味関心をおもちになった契機は何でしょうか。

滑川先生 子どもの綴方に興味関心を持ってしまして、明治や大正時代に子どもが書いた綴り方の作品を集めようと思いました。児童雑誌を集めて、それに載っている綴方と共にお伽噺や童話、童謡に興味をもったことが一つです。

それから、私が子どもの頃、父が『日本少年』や『少年倶楽部』などをたまに買ってくれました。巖谷小波の『世界お伽噺』が丁度田舎でも読まれていた頃です。父親が夕食後、弟や妹と一緒にして、お伽噺を読んできたのか、父が読んで知っている話をしてくれたのかははっきりしませんが、とにかくおもしろい話を聞かせてくれました。後でわかったことですが、それは小波のお伽噺なんです。こんなことも私に児童文学への興味を触発したと思います。

もう一つは、小学校四年生の時の田中先生のことが思い出されます。代用教員でしたが、文学好きで昼休みに物語を読んできたんです。それは、その時にはわかりませんでしたが、後で考えてみると『モンテクリスト伯』の翻訳です。黒岩涙香訳『巖窟王』です。昼休みに毎日続きを

読んでくれて、これが大変な楽しみで世の中にこんな物語のおもしろい楽しい世界があるのかということをはっきりとわかってくれました。この先生は師範の出でなかったからかえって考え方が自由で、秋田の新聞にも小説を書いていました。私の文学的関心をいたく刺激した先生です。あとは、友達と交換して熟読した、「立川文庫」という講談本の影響が読書へ誘いこんだと思います。

また当時、高等師範学校の学生が組織した大塚講話会というのがあって、口演童話をやっていました。それを始めたのは下位春吉や葛原菫で、下位春吉は『お話の仕方』という名著を書いた人です。この本は今見ても非常に新鮮な内容です。昭和初頭にかけて口演童話が全国的に流行しました。教師は、子ども達に童話を語ってやるようになり、いきおい、話材を創作童話に求めることになりました。巖谷小波、芦田恵之助、葛原菫の三人は、博文館の雑誌の子どもの投稿綴方の選者をしていました。そういう人達に誌上で出会ってしだいに児童文学のおもしろさがわかってきたわけです。

編集部 秋田時代のお話だけでもまだたくさんお聞きしたいことがあります、次の機会にうかがわせていただくようにしたいと思います。今後もしよろしく御指導下さいますようお願い申し上げます。本日は貴重なお話ありがとうございました。